

わたしたちの人権 71
 だれもが人間として生きていくうえで
 優ずることのできない当然の権利
 これが「人権」です

子どもの人権作文

12月の人権旬間に合わせて、子どもたちが書いた人権作文の中から、5名の作品をご紹介します。(18・19ページに続きます。)

「負けない心」

矢部中学校 3年 橋本 真佑



行った時に、1人の親子がいました。小さい子が「あの人、靴が変。」と言っていて私は黙っていました。するとその親が「みたらうつるけん見たらダメ。」と子どもに教えていました。とても辛くて泣いてしまいました。他にもこれ以上に辛いことも言われてきました。

みなさんはこういうことを聞いてどう思いますか。私はおかしいと思います。なぜ同じ人間なのに、外見などで判断したり、一部が違うだけで「あの人はずだ。」と区別されるのでしょうか。その人は安易な気持ちで言っただけかもしれませんが、言われた方の立場としてはとても辛く、その一言で死を選ぼう人も今じゃ少なくありません。

私もその1人でした。私はいろんなことを言われて、誰にも相談でき

ず、親にも言えず、いつのまにか自分の気持ちを押し殺し始めました。しかし、友達が手をさしのべてくれました。その友達は唯一何でも言い合える関係でした。だから、私は思いきって相談しました。すると友達「生きられる人が死にたいって言ったら、生きたくても生きられん人はどうなるか。」と言いました。

死にたいと思った自分が恥ずかしくなりました。だからこそ生きていく大切さや命の尊さを実感していくのかと思います。

私はみなさんに障がいということをお誤解して欲しくありません。見たらうつるとか、触つたらうつるとか冷静に考えればそんな事はありません。ことぐらい分かるはずですが、だからといってかわいそうとか言う同情も必要ありません。私はこれからは就



「父のいっし」

矢部高校(生活・園芸科) 2年 藤川 千鶴



リウマチという病気には、関節リウマチと筋肉リウマチの2種類あります。どちらも治るまでには、長く治療を続けなければなりません。私の父は関節リウマチという病気にかかっており、現在、治療中です。

父が20歳の時の話です。会社勤めをしていた頃、機械で腕をはさみ、手術を受け、懸命にリハビリを行っていたそうです。右腕のひじあたりには、熱や痛みを感じ取れないと聞きました。この腕のけがは、障がいの一つであり、障害者手帳を持っています。父の障害者等級は、3級です。私は障害者等級があるのを初めて知りました。

関節リウマチが発症したのは、49

歳の時と聞きました。運転中、ヒザに痛みを感じたのが始まりだったそうです。今でも、病気が治っておらず、毎日薬は欠かせないし、天候の変化で体調も変わるし、仕事も限られています。この数年間、いろんな出来事や想いがあったはずですが、父なりに乗り越えてきたから今の父がいると思います。

右腕の障がいは、あまり気にならないうえ、リウマチは自分の身体が、自分の思うとおりに動かせないのが辛いとききました。私は一緒に住んでいるからこそ分かることはあるけれど、父の気持ちは、聞いて初めて知りました。私は父にある質問をしました。それは夢についてです。病気がかかったことにより、今までとは別の世界にいるわけで、やり残したことはないのか、やりたいことはないのか、と疑問に思ったからです。父は、健康な人と同じことができれば最高だけど、今の自分よりもっと苦しんでいる人がいるのだから、人の痛みを分かる人間でありたいと想いがあるそうです。父の病気に対する気持ちは、大きいもので、簡単にこわれることのないものだと感じ

ました。自分が辛いとき、周りにはたくさんの方がいて、支え合うことだつてできます。父の身体を心配する祖母、妹のおばさん、それに私たち兄弟も父を心配しています。父は、病気の身体でありながら、ご飯を作ってくれたり、送り迎えなどもしてくれま。私たちが一番考えなくてはならないのは、父の身体のことだと思えます。

これから先、父の病状や私たちの将来、何があるか分かりませんが私にはまだはっきりした夢はありません。だけど、父の話を聞いたことを無駄にしてはいけなと思えます。思いやりの気持ちを大切に、たくさんの方との出会いを大切に、自分らしく生きていきたいと思います。

人権同和問題講演会

12月6日、浜町体育館で行われた人権同和問題講演会。山都町人権の集い。約3000人の出席のもと開かれた集いでは、このページで紹介する人権作文の発表に続いて、猿まわしの「反省ポーズ」で全国的な人気者になった村崎太郎さんが、「橋はかかる。被差別部落に生まれ育つて」と題して講演しました。著書やテレビなどで被差別部落出身を告白した村崎さんは、これまでの体験を通して、「みんなで差別をなくしましょう」の呼びかけだけでは解決しない。自分が結婚するとき、相手が部落差別の問題を真剣に考えてくれたように、一人ひとりが自分の問題として向き合わなければいけない」と訴えかけました。



講演する村崎太郎さん